尿から分離された *Actinotignum sanguinis* の一例

◎滝口 学[1)]、鈴木 亜里沙[1)]、小笠原 智子[1)]、小林 史枝[1)]、鈴木 靖政[1)]
社会福祉法人恩賜財団済生会 山形済生病院[1)]

【はじめに】Actinotignum 属は通性嫌気性グラム陽性桿菌であり、現在 3 菌種見つかっている。中でも Actinotignum schaalii(A.schaalii)は尿路感染や血流感染患者からの分離報告がみられるが他の菌種による報告は少ない。今回我々は、尿から分離された Actinotignum sanguinis(A.sanguinis)による感染症例を経験したので報告する。

【症例】74 歳女性。甲状腺腫瘍の既往あり。高血圧症、関節リウマチで他院にて投薬治療中。2 度にわたって尿路感染を発症。その後 ADL の低下をきたし急性腎不全の治療目的に当院入院となる。入院時に提出されたカテーテル尿より本菌が検出された。

【入院時所見】体温 37.0℃、WBC 11,500/μL、CRP 2.6 mg/dL、尿は肉眼的血尿を呈し、NIT(－)、WBC(3＋)、尿沈渣では細菌を認めた。腹部エコーでは胆石(－)、水腎症(－)、膀胱内に泥状沈殿があった。

【細菌学的検査】検体のグラム染色では Corynebacterium 様のグラム陽性桿菌を多数認めた。分離培養にはヒツジ血液寒天培地、BTB 乳糖寒天培地による好気培養を実施し、チョコレート寒天培地による炭酸ガス培養を追加した。分離培養 3 日目では好気培養、炭酸ガス培養ともに発育を認めなかった為、ABHK 寒天培地による嫌気培養を追加した。炭酸ガス培養 6 日目に微小コロニーを、嫌気培養 4 日目に 1ｍｍ程度のコロニーの発育を認め、カタラーゼ試験(－)だった。VITEK2compact の ANC カードにて同定を実施したところ A.schaalii と同定されたが、Actinotignum 属で同定可能な菌は A.schaalii のみだった為、後日外注先に質量分析法で精査依頼した結果 A.sanguinis と同定された。

【考察】本症例はグラム染色により培養条件を変える事で同定に至った症例だった。尿では好気培養以外を行うことは少ないが、グラム染色にて Corynebacterium 様の菌を認めた場合は炭酸ガス培養や嫌気培養を追加することが必要であり、グラム染色の重要性を再認識した。本菌属は生化学性状による同定が困難であることから、質量分析法や遺伝子検査を行うことが有用であり、臨床へ正確に結果を伝える事に繋がると考える。

連絡先 023-682-1111(内線 2341)